本棚ぶらり

海を見つめなおす

夏といえば、海水浴の季節。
海を題材にした作品もたくさんありますが、
今回は海がもつ様々な表情を教えてくれる本を
ご紹介しましょう。

復讐する海
捕鯨船エセックス号の悲劇
ナサニエル・フィルブリック著、相原真理子訳　集英社　2003年

皆さんは、クジラはやさしく、おとなしい動物と思ってはいないでしょうか？

クジラ、特にマッコウクジラからは良質の鯨油が採れるため、欧米では17世紀中ごろから、沿岸での捕鯨が開始されました。その結果、またたくまに沿岸付近のクジラが捕りつくされ、18世紀には大型の帆走捕鯨船を用いた遠洋捕鯨の時代を迎えます。

捕鯨船エセックス号は、当時、遠洋捕鯨の基地としてその名を轟かせた北米東海岸の島、ナンタケット島から出港しました。

エセックス号の悲劇をもとに著された、ハーマン・メルヴィルの小説「白鯨」では、船が巨大なクジラに撃沈されたところで終わります。が、現実のエセックス号の悲劇は、ここから始まったのでした。「人間という生き物が残酷な海とどこまで闘えるかを見るための、おそろしい実験が開始された」のです。

極限まで追い詰められた人間がたどる人生の結末とは如何なるものか……。今宵ひとり本書をひも解けば、人間の秘められた本性そしてクジラの本性について、あなたもきっと、何かを感じずにはいられないでしょう。

海辺で出遭うこわい生きもの
山本典暎著　幻冬舎コミックス　2009年

ダイビング、釣り、サーフィン、潮干狩り、海水浴など、海は子どもから大人まで夢中になれる遊び場ですが、その楽しさには常に危険がついてまわります。

本書は、大ヒットした映画「ジョーズ」のホホジロザメ、青い蛍光色が浮かび優雅ですが実は猛毒を持つヒョウモンダコなど、人間に危害を加えた記録や加える可能性のある海生生物－12種類をカラー写真で紹介しています。

著者自身の経験が詳しく紹介されていて、「噛む」「刺す」などによる怪我自体よりも、「毒」による症状のほうが重度な危険に繋がることが指摘されています。

海の生きもののほうから積極的に人を襲ってくるより、人が不用意に近づいたために被害にあうことのほうが多いとのこと。必要な知識や装備を持てば危険を防ぐことができるそうなので、十分な準備のうえ、海へお出かけください。

海女の島－舳倉島－
F・マライーニ著、牧野文子訳　未来社　1964年

著者はアイヌ民族の研究やチベット探検などで知られるイタリアの文化人類学者。魚貝類を多用した食文化、毎日の入浴の習慣、水泳の普及など、著者の故国イタリアと比べても海との結び付きが深い日本文化の特性に着目し、日本民族の中でもとりわけ海の人と言える「海女」へのアプローチを試みます。

本書が出版されたのは、今から半世紀ほど前のことですが、当時すでに、日本の大半の海女村が観光客のための見世物となっていたそうです。著者は本来の海女の姿を求めて、日本海は能登半島の北方に位置する舳倉島に渡ります。

ウェットスーツやダイビング機材等は一切なかった時代のことです。ときには一分間もかかる水深20メートルでのアワビ採りを、一日中海女たちは繰り返します。海女の労働はたいへん過酷なものでしたが、女性の力によって島の漁は支えられていたため、舳倉島では、当時の日本の一般社会よりも女性がずっと重要な地位を占めていました。

原著者は男性なのですが、訳者のいかにも女性らしいセンスの文章が、この本が今も読み継がれるだけの魅力を与えています。

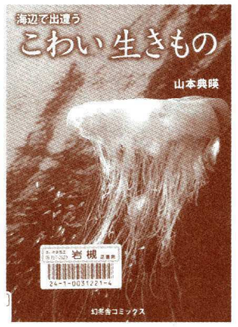
漂着物学入門
―黒潮のメッセージを読む
中西弘樹著　平凡社　1999年

遠い国々から空間と時間を旅して海岸に流れ着いた多くの漂着物。海藻や貝殻など海由来の物だけでなく、植物の種や文化、生活習慣までもが海流に乗って移動しており、ゴミや投棄物など迷惑なものも時には見られます。

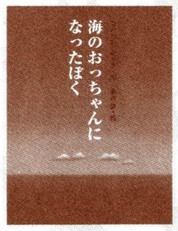
一方、流木や漁網のガラス製の浮きなどインテリアとしてうってつけのものもあり、その収集を趣味としている人もいるほどです。

本書は、長年日本全国の海岸を歩いてきた著者が、漂着物が語りかける海と生物と人間の博物誌をまとめたものです。そこには、単に珍しい「もの」だけではなく、政治や社会の動き、ひいては環境の変化まで映し出されているといいます。機雷や政治宣伝ビラ、有毒物質といった人工物のほかにも、海流の流れなど自然科学に関すること、海岸線の変化や海面上昇など地球規模での課題など、実に多くのことが見て取れるそうです。

そういえば、東日本大震災の津波で流出したサッカーボールが、アメリカ西海岸に漂着したという二ニュースも最近ありました。皆さんも海岸へ出て、「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ」を探してみませんか。きっと、いろんなメッセージが読み取れるはずです。



大人も楽しめる絵本の世界　第1回



海のおっちゃんになったぼく
なみかわみさき文、黒井健絵　クレヨンハウス　2006年

波うちぎわで「ぼく」が拾った不思議な青いビー玉。コップに入れて「からからん」ってふったら、「がらがらん」って回り、「ぱちん！」って割れてしまった。コップの中にはしょっぱい水が……。「海のこども」を飼うことになった僕。でも「海」はどんどんどん大きくなり、ぼくの手には負えなくなっていく。大阪南部の泉州弁で語られるファンタジー絵本。

この絵本の画家黒井健は、色鉛筆を用いた、繊細で温かみのある、柔らかな印象の作風で知られています。「ころわん」という子犬が主人公の絵本シリーズ（間所ひさこ文ひさかたチャイルド）や、新美南吉の有名童話『ごんぎつね』、『手ぶくろを買いに』（いずれも偕成社）といった絵本が代表作の有名な絵本作家です。

しかしこの作品のように、大人も楽しめるような不思議な味わいのある作品も書いています。もっと幻想的で、怖い話の方がお好みという方には、『リリアン』（山田太一作、小学館　2006年）をお薦めします。

今号より始まった、大人も楽しめるユニークな絵本を紹介するこのコーナー、何分風変わりな本を紹介するコーナーですので、市内で数冊しか所蔵のない絵本を取り上げる場合もあります。興味を持たれた方は、リクエストでお取り寄せになり、ご覧いただけたら幸いに思います。